

行政視察報告書

令和5年 12月15日

長浜市議会議長 中川 勇 様

長浜市議会議員 田中真浩

印

田中真浩

私が出席した行政視察の結果について報告します。

記

視察等名 令和5年度 会派(新しい風)行政視察研修

視察期間 令和5年11月22日(水)～11月24日(金)

視察場所及び目的

①福島県会津若松市

「観光について」

②宮城県仙台市・名取市

「震災復興について」

③福島県浪江町

「ゼロカーボンについて」

調査内容感想等

・視察の目的

①福島県会津若松市市役所(観光課)

令和5年11月22日(水)14:00～16:30

視察テーマ【観光について】

会津若松市の立地は福島県という広大な県の西に位置する盆地にある。入るも出るも、峠を通るというイメージがある。福島県は阿武隈高原・奥羽山脈・に縦断され、浜通り・中通り・会津地方と3地域に分類されていて、横断に不自由である。そんな中、会津若松市は浜通りに出るより越後山脈を越えて新潟に出るほうが早いとされている。そういった立地であるため、観光客は滞在型になることが多い。高山市と同じである。また、観光資源も実に赴き深いものがある。長い歴史を鑑みれば、長浜のほうが豊富と言えるが、歴史のインパクトとしては会津藩に及ばない。幕末の主人公と言えばやはり、薩長土肥であるが幕府側から見た主人公は会津藩である。京都守護職、松平容保・新選組・白虎隊・戊辰戦争、そういった短期間に燃えつくす壮絶な歴史を持ち、市民の意識の中にも未だ会津の什の掟などとともに会津人としての誇りが根底にあるような気がする。この住民の共通する意識の共有というのは街づくりをするうえで非常に大切で有益なものだと感じている。たとえば長浜で世界遺産として登録された曳山祭りでも、余呉の人間からみれば全く関係のない異文化であり他人事と感じている人が多い。長浜市全体でこれはという共通する意識というものはあるだろうか、僕には思い浮かばない。

会津若松市の具体的な観光の取り組みとしては、七日町通りでのスマホアプリ、音声AR「SARF」を利用した、物語仕立ての町探索イベントがある。街を歩いているだけで新選組の土方歳三や斎藤一が物語仕立てで町案内をしてくれるというものだ。これは、長浜でもできなくもない取り組みだと思う。

また、観光客は滞在型が多いため、飲食店も一工夫されていて【極上の梯子酒】という取り組みがなされている。酒と食事1,000円均一で多くの居酒屋、割烹屋などがメニューを用意している。これも長浜でできなくもないが、交通の便が中途半端に良い長浜市は、滞在型旅行客の絶対数が足りないと思う。駅前にホテル、歩いて行ける範囲に、繁華街、歓楽街があるのが望ましいが

そういえば通りの名前に、野口英世の名がついているのも面白い。

鶴ヶ城は戊辰戦争でボロボロになったが写真も残っているし、石垣もほとんどがのこされているため正確な復元がなされている。中は鉄筋コンクリートで戊辰戦争の経緯などの資料館となっている。長浜城とは同じ資料館と言っても、次元の違うものである。

補足 市の職員の案内で七日市、鶴ヶ城を回ったが。実に親切でありました。おもてなしの心が極めて自然な感じでありました。

②宮城県仙台市・名取市

令和5年11月23日(木)13:00~15:30

「震災復興について」

1) 仙台市立荒浪小学校

仙台市立荒浪小学校は現在震災遺構とされています。海沿いの学校で震災時校長先生、教頭先生の指示により、生徒と近隣住民が学校屋上に避難し生徒には死傷者無し住民の被害も少なく済んだところである。地震発生時から津波到来まで約1時間あったため、避難所から自宅に何かを取りに帰って犠牲になった人がいたようだ。また避難してきた人も、津波到来まで危機感が薄く教頭先生の呼びかけにもかかわらずなかなか校舎に入ってくれず校庭で避難警報解除をまっているふうな人も多く校舎に入ってから津波到来まで余裕がなかったようです。結果校舎2階まで水没し1階には、津波に押し流された自動車が飛び込んでいました。

現在学校のまわりに住宅はなく、建築禁止地区となっており学校の傍に海水浴客の避難所として1000人収容の高台が設けられています。

特筆することは、校長先生の指示が的確であったこと。避難場所は体育館である可能性もあったのだと聞きました。

2) 名取市閑上地区

名取市閑上地区は多くの犠牲者が出た地域です。名取市7100人(当時)のうち923人が犠牲なりそのうち753人が、閑上地区の犠牲者です。犠牲者が多かったのは下の理由からです。

*先人の教訓が伝わらなかった。

昭和8年三陸沖地震で津波が起こり、戒めのための石碑が立っています。そこには【地震がおきたら津波に注意】と刻まれています。こういった石碑は閑上地区に限らず三陸海岸の他地域にもいくつかみられ、【これより下に家を建てるな】といったものもあります。にもかかわらず石碑より下の海岸沿いに住宅地が建てられ、地震があったにもかかわらず津波は来ないと用心をおこたった。

*津波は来ないという神話

チリ地震津波の際、閑上には浸水がなかったことから閑上には津波は来ないという神話を作ってしまった。また「津波は貞山堀を越えてこない」と伝えられこれが大きな慢心となった

*安全宣言が出るまで避難所を離れない

一度避難所に避難していた人が津波はまだ来ないと判断して自宅に物を取りに行き被害にあっている。

*防災無線がヒューズ切れで放送されていなかった。

防災無線が働かなかった。しかし震度6もの地震が4分続けば津波を警戒しなければならなかった。

以上4項目を主な問題点として取り上げている。強く感じることは過去の悲惨な災害も80年もすると風化してしまう、先人の教えが生かされなかったことが残念で有るとともに近代技術への過信が自然の力を侮る結果につながっているとおもふ。

長浜でもや津波はあるまいが、自然と共存している限り経験のない豪雨風雪干ばつなどは、起こりうると考えそれに備えることが非常に大切だ。

また、避難には迅速な周知が必要だがそのためには防災無線がしっかり機能していなければならないと考えさせられたが長浜の防災無線聞きづらいという声が上がっている。早急な対応が望まれる。

③福島県浪江町

令和5年11月24日(金)9:40～11:00

「ゼロカーボンについて」

福島RDMセンター會澤高圧コンクリート

コンクリート会社とは思えないほどの近代的で前衛的な建物の中に研究施設と研修ブースがあった。多種企業をネットワークでつなぎ近未来社会を創造する

福島イノベーション・コースト構想に取り組んでいる企業です。

日本は資源がない国(本来はそうではない)なので特にエネルギー問題は国家の生き死にを左右する問題だ。福島イノベーション・コースト構想では、エネルギー問題に対して水素の利用を推進しようという構想で、海上風力発電で海水からアンモニア水を作り安全な形で輸送し工場でアンモニア水から水素を取り出すという構想で自動車の燃料を水素で賄うというものである。水素は燃焼しても水ができるだけで、二酸化炭素や窒素酸化物を出さずクリーンなエネルギーと言える。會澤高圧コンクリートはそのプロジェクトのなかの海上風力発電の風車の本体をコンクリートで作る工程で、ドローンを使った3Dプリンターのコンクリート版を使用することで工事の簡略化に努めます。実現すれば夢のような話です。